

曲 目 解 説

新しい耳シリーズ Vol. 5 ~ 20 世紀の打楽器スピリット ~

この1世紀さまざまな音楽が現れてきましたが、打楽器は時代を映す鏡としてその重要度を増してきています。その作品の、先駆けからコンテンポラリー、西洋そのものから東西の融合へという観点でのプログラムです。

1 チャールズ・アイヴズのための通夜

「ドラム・クァルテットのための3つの小品」の中の1曲で、4つのテナードラムのために書かれている。2小節単位の繰り返しは1パターンで、最初の2小節には6つのパルス(8分音符)があるのみだが、繰り返すうちに1つの8分音符に32分音符が1つずつ加えられ、次々と積み重ねられていく。ミニマル・ミュージックの1つ。淡々とした語り口が次第に大きな流れとなり語られたものの存在感にうたれる。1974年の作品。

2 打楽器のためのトッカータ

打楽器を主体とした作品は今や珍しくもなるともないが、メキシコの作曲家によるこの作品は作曲当時、打楽器合奏という新分野の先駆けとなる作品であった。クラベス、マラカス等メキシコの民族楽器は用いられているもののオーケストラで通常使われる楽器を主とした作品で、音形反復が多く、簡素で自由な形式をねらったところからトッカータと名づけられた。3つの楽章からなり、それぞれ三部形式をとっているが間奏曲の役割を果たす2楽章は、木琴のほかは金属打楽器だけで奏され、神秘的、密教的雰囲気満ちている。1942年の作品。

3 阿 吽 (あ うん)

<パーカッション・グループ72>の委嘱作品として1975年に書かれたこの作品は初演後いろいろな団体に再演され国際現代音楽協会の入選作となり、同協会の世界音楽祭でストックホルム打楽器合奏団の演奏で広く強い関心を買った。タイトルは阿吽と日本語で書かれる梵語の字母の第1音阿(口を開く発音)と字音の終わり吽(口を閉じた形)、ということから万物の初めと終わりをあらわしている。5個のクロマティックティンパニを5人の奏者がそれぞれ1個ずつ担当し、ゆっくりした(レント)1楽章と早い(アレグロ)2楽章からなる。邦楽的な抑揚の身振りや掛け声とともに合奏される。約20年前、作曲者から謹呈された楽譜(スコア)を使用。

4 ゲインズバラ

トマス・ゲインズバラ(Thomas Gainsborough 1728-88)はイギリスの画家で肖像画のほか風景画、風俗画なども手がけている。自らもヴィオラ・ダ・ガンバを奏したゲインズバラにはヨハン・クリスティアン・バッハなど音楽家の友人が多かった。曲は絵に由来したとみられる3つの楽章からなるが、2台のマリンバ、ヴァイブラフォン、ティンパニ、チャイム、グロッケンシュピールの音程感を生かして調性を明確にした作品で、2楽章は、「ゆっくり、ためらうように」と指示されているようにゆったりとしてかつ上品であり、ヴァイブラフォンのレシタティブが魅力的。1965年の作品。6人で演奏されることが多いが、今回は5人で演奏。

5 ヴァイオリンと打楽器合奏のための協奏曲

打楽器とはいえ、空缶、(自動車の)ブレーキドラム、フラワーポット、洗濯オケ、鉄パイプなどを動員したオーケストラからはガムランのスタイルによるリズムックで刺激的な、しかもしばしば繊細で色彩豊かな響きが得られる。このテクスチュアの響きに対し、ヴァイオリンはリズムックで色彩豊かな面もあるものの、メロディをととも大切にすることにより一層の存在感を示している。第1楽章アレグロ、マエストーゾ(荘厳に)、第2楽章ラルゴ、カンタービレ(歌うように)、第3楽章アレグロ、ピゴローゾ(力強く)、ポコ・プレストの3楽章よりなる。1959年完成版にて初演。約20年前に楽譜を発見して以来の思いが実った曲。